

文化庁 平成 28 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

「諸外国における民間文化支援の動向調査」

2016 年度マレーシア視察調査（クアラルンプール・ペナン）

実施日：2016 年 8 月 24 日（水）～26 日（金）

1. 調査の目的と概要

企業メセナ協議会では 2015 年より、諸外国における民間の芸術・文化振興の動向を調査し、文化支援の考え方や枠組みの違い、日本の企業メセナとの比較や参考となる事例を得るため、ネットワークのある各国文化機関を中心に現地視察とヒアリング調査を実施している。

今回は、2014 年より継続実施している国際会議のパートナー機関、マイ・パフォーミングアーツ・エージェンシー (MyPAA) の協力を得て、クアラルンプールの民間文化施設を訪問し、ヒアリングを行った。また現地で実施された MyPAA との共催による国際会議に参加したほか、同国有数の観光地、ペナン島・ジョージタウンでの半官半民組織による地域振興策についてのヒアリングも行った。

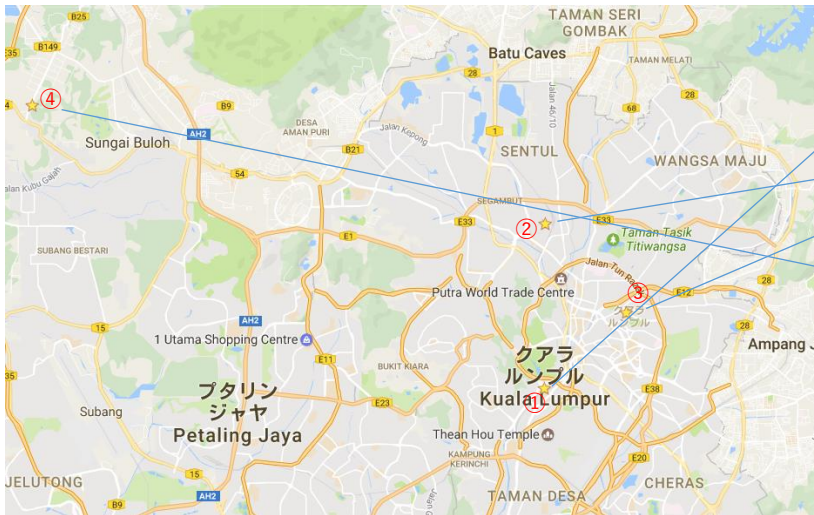
2020 年に先進国になるという目標を定めているマレーシアでは、政府主導のもとクリエイティブ産業への投資、観光の観点からの文化振興に注力している。一方で、多民族国家としていかにそれぞれの文化の違いを受け入れ、理解していくかが文化関連団体にとっては重要なテーマとなっている。アーツカウンシル設立の計画もあるが、資金獲得や文化市場の拡大が課題となっている。

ペナン島では、中間支援組織シンクシティにより、古い建物やまちの歴史を活かしながら都市を再生する取り組みが行われており、世界の都市化が進む中、いかにヒューマンスケールで心地よい都市をつくるかという問題意識は、参考にすべき点が多いように感じられた。

2. 日程・視察先

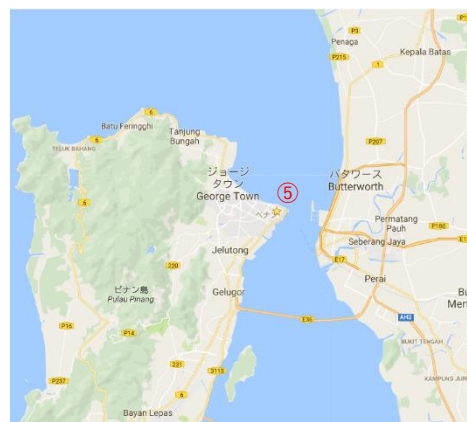
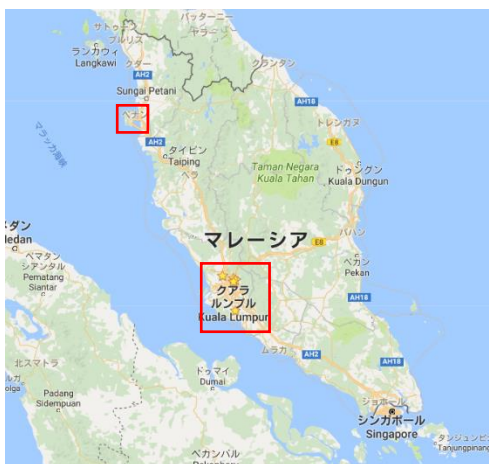
8/24 (Wed)	①	国際会議「創造経済の実現に向けて：文化資本による経営と、社会資本としての文化の振興～ASEAN ネットワークの構築に向けて」 http://www.mecenat.or.jp/ja/events/post/_asean_20160824/ 於：Le Meridien Kuala Lumpur (Sentral Stesen, Kuala Lumpur 50470)
8/25 (Thu)	②	The Kuala Lumpur Performing Arts Centre (KLPAAC) http://www.klpac.org/ Jalan Ipoh, Kuala Lumpur, Wilayah Persekutuan Kuala Lumpur
	③	Dewan Filharmonik Petronas / Malaysian Philharmonic Orchestra http://dfp.com.my/ http://mpo.com.my/ Kuala Lumpur City Centre 50088 Kuala Lumpur
	④	Rimbun Dahan http://rimbundahan.org/ Km. 27 Jalan Kuang Kuang Selangor, 48050
8/26 (Fri)	⑤	Think City http://thinkcity.com.my/ The Star Pitt Street, No 15. Jalan Masjid Kapitan Keling, 10200 George Town, Pulau Penang

実施者：荻原康子（事務局長）、末澤汐音（調査研究）



【クアラルンプール市内地図・訪問先】

- ① Le Meridien Kuala Lumpur
- ② The Kuala Lumpur Performing Arts Centre
- ③ Dewan Filharmonik Petronas
- ④ Rimbun Dahan



【ペナン島地図・訪問先】

- ⑤ Think City

3. ヒアリング結果

3-1. 国際会議「創造経済の実現に向けて：文化資本による経営と、社会資本としての文化の振興－ASEAN ネットワークの構築に向けて [クアラルンプール会議]」

■日時: 8月24日(水) 10:30～11:30 クローズドミーティング、13:30～18:00 国際会議

■会場: ル・メリディアン・ホテル

■出席団体・登壇者:

【クローズドミーティング】

マイ・パフォーミングアーツ・エージェンシー、マイ・クリエイティブ・アドベンチャー、マレーシア文化省、マレーシア首相府 (マレーシア)

ナショナル・アーツカウンシル・シンガポール (シンガポール)

在マレーシアフィリピン大使館 (フィリピン)

【国際会議】

イザン・サトリナ・モハメド・サレフディン

(マイ・パフォーミングアーツ・エージェンシー ディレクター, マレーシア)

尾崎元規 (公益社団法人企業メセナ協議会 理事長)

三木あき子

(ベネッセアートサイト直島 インターナショナル・アーティスティック・ディレクター)

斉藤幸博 (株式会社資生堂 企業文化部長)

マジェート・ハムダン (シンクシティ専務理事、マレーシア)

能登剛史 (アート・ミックス・ジャパン 総合プロデューサー、新潟総踊り祭実行委員会副会長・総合プロデューサー、にいがた食の陣実行委員会実行委員長)

■会議概要

※現地関係者の発言のみ抜粋。()内は発言者。

(1) マレーシアの民間による文化振興の動向

- アジアの国では、文化は政府支援に依存しており、マレーシアも企業が共同で何かを進めるということができておらず、政府の人間がリードしている。こうした状況を変えるため、マイパフォーミングアーツエージェンシーでは 2 年間にわたりマレーシア企業 20~30 社と会い、ネットワークづくりと文化支援の在り方について議論を進めてきた。
- 2014 年頃、東南アジアの数都市が参加するクリエイティブネットワークを設立し、ASEAN との協定を進めている。各国都市のネットワークを目指しており、共同事業としてフォーラム、マスタークラス、展覧会の開催等を検討している。ここでは政府を外してものごとは進められないため、民間だけでなく政府の協力も得ながら進めていく予定。
- シンガポールにはフィランソロピー協会があり活発。インドネシアにもある。都市の開発、アートマネジメント、機能的デザイン、コミュニティ、イノベーション、地域参加、起業家に関する、様々な都市や国との交流が必要と感じている。(マイ・パフォーミングアーツ・エージェンシー)

(2) マレーシアの文化政策

- マレーシアは製造業、石油、ガスに頼ってきたが、2020 年に先進国になる目標を定め、知的産業に力をいれていく準備を行っている。大蔵省と連携し、クリエイティブ産業に投資している。銀行やベンチャーキャピタルは芸術・文化に融資する考えはもっていないため、政府が一步踏み込み、我々の機関でワーキングキャピタルという融資の仕組みをつくった。自営業のローンと同じ仕組みで、文化団体から 4~5 年先までの事業提案を受けてビジネスローンとして融資する。これまで 4 年間運営しているが、対象となった 75 社のうち返済が難しいのは 2 社のみと、よい結果。運営費は利息で賄っている。(マイ・クリエイティブ・アドベンチャー)
- マレーシアでは 2020 年までに先進国になるという政府目標に向けて活動を展開しているが、文化省の管轄で芸術・文化分野を改革するため、コンテンツ開発、工芸の発展など 5 分野のワーキンググループを設けた。現在は政府が中心の活動なので、民間からの参加を呼び込みたい。
- 政府にとって重要なのは観光。芸術・文化はいままで無視されてきたが、近年、観光省でも文化を視野に入れるようになった。マレーシアは多様な文化がありながら活用できていない。関心の高い人々を集めてカルチャーラボなどを開始している。
- 石油価格も落ちてきている状況の中で、どこから資金を獲得するかが課題。1、2 月に開催したカルチャーラボでは資金不足、市場不足について議論を行った。民間企業から提案されたものを政府側でサポートしていきたいが、既存の小売業のインフラをどのように活用していくべきかとの指摘もあった。国内各地で独立した活動が行われているので、小さなプレイヤーが参加できる仕組みづくりも必要。レイヤーごとに特

化したイベントを計画したい。分野ごとにプレイヤーを決め、観光省など政府が必要なプロモーションを行う。(首相府)

- 現在、アーツカウンシルを設立する計画も進んでいる。クリエイティブ産業では幾つかの省庁で似たような活動があるが、芸術・文化振興については文化省が中心的な役割を担っていく。(文化省)
- マレーシアのアーツカウンシル設立については、過去にも2回計画あったが失敗してきた。グランドアップではなく、トップダウンで話を進めてほしい。(マイ・パフォーマンス・アーツ・エージェンシー)

(3) ペナン島でのシンクシティの取り組みについて

- 世界の都市化が進み、現在、全世界では50%の人が都市部に住んでいるといわれている。マレーシアの都市人口率は、1911年に11%、1970年に28%、2013年に75%になった。そこで、マレーシアの人々の美的価値観は変化し、自然の美しさから、都市のランドスケープや建物といったものへ関心が移っている。自然災害より、都市ならではの公害や渋滞、煙害などが問題となっている中で、人々の暮らしや仕事において、どのようにヒューマンスケールで心地よい都市をつくれるか、ということを考えている。
- ペナン島のジョージタウンは2008年に世界遺産になったが、街を現代化するのではなく、古い街並みや古い建物や家、公園を改装して活かす、という取り組みをしている。公園や建物の改装だけでなく、お祭りや、世界中のアーティストを呼び壁画を作成してもらうプロジェクトなど、人々の生活の中から芸術・文化を通じて街を再生させるプロジェクト「ペナン・ストーリー」を実施している。これらの取り組みによって、公園でフリーマーケットが始まり、パフォーマンスアーツの舞台にもなるなど、街に活気と変化がうまれている。(シンクシティ)

(4) 今後の課題

- 資金不足と雇用の機会、セールス・マーケティング、インフラ不足の4つが大きな課題。我々は資金不足を解消するために組織されたが、これを解消することで職も生まれ、マーケティングやインフラ整備の解決にもつながるのではないか。文化省ではアーティストのプロモーションを促すため、市場創造のための資金投資を政府に依頼している。ファッション、クラフト、アート、コンサート、パフォーマンスアーツのセンターをクアラルンプールはじめ各都市につくれば活性化される。世界中の類似施設に対するベンチマーク調査も必要。ロンドンやカイロの市場、バリのウブドなど。
- 東南アジアの創造都市ネットワークに参加している都市をどうつなげていくかも課題。文化ゲートウェイ、コンテンツ開発、クラフトの商業化を促進したい。
- 企業に対する税金控除で、マレーシアでは1,000リンギットを寄付すると税金が免除されるようになっているが、それがアートでもできないか。年間を通じて大小さまざまなイベントを行い、地域ごとに活動を進めるのも一つの方法だろう。(マイ・クリエイティブ・アドベンチャー)
- 民間のファウンダーは芸術に投資をしても効果がわからない。GDPがどれほど伸びて、職がどれくらい生まれるかという、アドボカシーも必要で、政府にも働きかけていきたい。
- 日本の企業メセナ協議会では、優れた芸術・文化支援活動に取り組んだ企業を顕彰する仕組みがある。日本ですでに成功しているものを取り入れることもできないか。企業、政府機関がデータや情報を共有し、適切な政策づくりを行えないか。シンガポールでは数年かけて国内の文化状況を調査し、その後の政策を進めてきた。自然災害の被害を受けた地域に対する企業ファンドなども進められればと思う。

- 日本では生活の一環として芸術をとらえ、国や自治体の発展に貢献するという考えがある。シンガポールは国の振興になるというスタンス。フィリピンは政府と草の根のグループが交流を進めている。マレーシアでは経済振興の視点からクリエイティブ産業が優先すべきジャンルとされ、カルチュラル・エコノミーは二の次にされる。中心にあるべき草の根の育成、アートの創造性が生まれるところを無視して、その外に資金が投資されている。(マイ・パフォーミングアーツ・エージェンシー)

【参考】シンガポールの文化支援の現状について

ナショナル・アーツカウンシル・シンガポールより

- シンガポールではアーツカウンシルが芸術・文化への資金提供を行い大きな役割を果たしたが、今後も継続していくことが必要である。2011 年には民間とのカルチャーマッチングファンドを行い、短い期間で200 ミリオンドルのファンドになり、世間の認識も高まった。2015 年の独立 50 周年には多くの芸術文化活動が行われ、注目を集めた。
- シンガポール・アーツカウンシルは芸術・文化育成のスタンスをとっている。「アート」とは比較的新しい発想で、英語の「Arts」と東洋で捉えられてきた「アーツ」は違うし、国によって発展の仕方も違う。シンガポールでは、芸術・文化が育つには時間が必要である。アドボカシーによって国民が生活の中でアートがどれだけ重要かを認識し、ボトムアップで活動が生み出されてくるようにしていかななくてはならない。学校のカリキュラムにも入れてもらい、生活の一部であることをわかってもらいたい。市場も創出していかななくてはならない。

3-2. 現地文化団体へのヒアリング

クアラルンプール・パフォーミング・アーツ・センター (KLPAC)

■沿革・概要



左) 吹き抜けになっているセンターの入口

中) 劇場では毎月多数の公演が上演されている

右) フェスティバルで展示された「未来のライフデザイン」コスチュームデザイン

舞台芸術に特化したクアラルンプール市内でも有数のアートセンター。1989 年、「マレーシアパフォーミングアーツの父と母」と呼ばれるジョー・ハッシュム氏とダト・ファリダ・メリカン氏によって設立された。

センター内には大・中・小の劇場やイベントスペース、スタジオがあり、舞台芸術の公演のほか、ダンサーや舞台制作スタッフ育成のためのアーツアカデミーの運営、パートナー団体であるサイムダービー財団との共催によるアートフェスティバル等が行われている。

アートセンターの施設は、130～140 年前に建てられたマレーシア国有鉄道の南部路線のターミナル駅だったもので、敷地は設立時からのパートナーである YTL コーポレーション(マレーシア最大の複

合企業の一つ。主要事業はユーティリティ、高速鉄道、セメント、建設業、不動産、ホテル、リゾート、技術開発など)から寄付された。現在はサイムダービー財団からの支援も多く得ている。

■運営コンセプト

運営コンセプトは、1)もともとある資産、素材を活用すること。2)コミュニティに対しオープンであること。3)すべての人のための劇場であること。



左)ブラックボックスのステージ。演劇公演の舞台セットが設営されている。

中)大劇場。壁の装飾は旧駅舎の廃材を利用したもの。1階席は車椅子でも出入りしやすい仕様になっている。

右)階段や廊下はギャラリースペースになっており、絵画などが展示されている。

これらの考えに基づき、1)施設は駅舎をそのまま活かすかたちでリノベーションしており、レンガ造りの劇場ホワイエの壁や劇場内の装飾など、昔の設備をそのままに、または廃材を再利用して内装デザインに使っている。2)屋外の広い敷地は、1990年代にはゴルフコースとして使われていたが、現在では近隣住民に開かれた公園になっており、フェスティバル会場としても活用されている。事務局スタッフはセンターの中2階にあるガラス張りのオフィスで勤務しており、施設の中心を通る階段から見えるようになっている。利用者に顔の見える運営が目指されている。3)劇場内ではVIP席やドレスコードは設けられていない。大劇場はバリアフリーにも配慮した導線・座席配置になっている。

■主な事業と運営体制

3つのホールと9つのスタジオを有し、最も大きいものは504席の劇場、次に200席のブラックボックス(ホール)、そのほか映像の上映をできるような小さいスペースも所有している。上演だけではなく、次世代育成のためのアクターズスタジオ＝アカデミーも運営されており、ワークショップやレッスンが行われている。

◇劇場

劇場で行われる公演は主に、1)主催公演、2)貸館事業、3)アカデミープロデュースの公演の3種類。日本のカンパニーによる公演もある。200席のブラックボックスは、座席の配置転換など機動性が高く、経費的にも扱いやすいため、70%が主催公演で使っている。大劇場にはコンパクトなオーケストラピットも設けられている。

◇アートフェスティバル

サイムダービー財団との共催により、2014年から隔年で開催されるアートフェスティバル(事業費はサイムダービー財団が負担)で、次の4つのコンセプトを大切にしている。1)マレーシア人によるマレーシア人のための、地元の才能を高めること、2)伝統芸能とコンテンポラリー、劇場とダンスとビジュアルアートなど、すべてのジャンルを融合した多様性あるプログラムとすること、3)参加費無料、参加しやす

い雰囲気づくりに努める、4)鑑賞すること、実際にやってみること、参加することを通して、インタラクティブな体験してもらうこと。

初年度の2014年は半年間かけてさまざまなプログラムが行われ、9月に2日間のファイナルイベントが行われた。参加者数は約15,000人。観客の満足度も高く、98%の参加者からフェスティバルを継続してほしいという感想を得た。

2016年のテーマは「芸術教育と未来」。1年間開催され、ファイナルは8月下旬の2日間、両日10～22時に開催された(キッズゾーンは10～12時)。参加者アンケートによると、42%が初めてここKLPACを訪れた人で、2014年からの参加者は9%。全体で300件の活動があり、18会場で450人のパフォーマーが参加した。シェークスピア作品のような大規模な公演から、ワヤン人形劇など伝統芸能のほか、版画やバティックペイントなど誰でも参加することができるワークショップも開催。アートセンターでは衣装デザインワークショップでつくられたコスチュームの展示会を行った。夜間はピアノやオーケストラ、舞踏公演、ロックコンサートを開催。すべて地元のアーティストによるもので、観客とアーティストが近い距離にあるのが特徴だった。



2016年度ファイナルイベントの概要



アーツ&クラフツワークショップ

◇運営体制と収益構造

KLPACの運営スタッフは40名おり、プロダクション、テクニカル、アカデミーの運営に関わっている。課題は資金不足と観客開拓。利用者は19～35歳の女性が多い。

運営費は、年間6,500万円(2.4ミリオンRG)。設立から10年経ったところ一度改修工事を行い、現在の年間運営費は8,800万円(3.3ミリオンRG)となっている。

アーツアカデミー卒業生によるパフォーマンス

スタジオでアカデミー卒業生らによるパフォーマンスを鑑賞。演目は、インド伝統舞踊、中国チベット系ダンス、マレーシア伝統舞踊、コンテンポラリーダンス。メンバーのうち何人かは、現在、アスハラ研究所などで振付家としても活動している。



サイムダービー財団の文化支援について(理事ヤテラ氏)



財団が支援対象としている分野は、1)教育、2)コミュニティ、3)環境、4)若者とスポーツ、5)芸術・文化の5つ。KLPACには6年間で1億1,200万円の助成をしており、主にテクニカルとメンテナンス費用、ITに使われている。それでも資金はまだ必要で、サイムダービーが助成することによって信頼を得て、他の企業からも支援を得ることも狙い。現在は、国営の電機会社が支援を始めている。

若手の舞踊家を育てるため「アスハラ・カンパニー」には10数年にわたり7,000万円ほどを投じてきた。このカンパニーはマルチカルチャーを特徴としており、インドもマレーの踊りも皆踊れる。マレーシアでは経済的な補完がないと持続的な芸術活動が難しいが、支援をすることでダンサーの資質を高め、ニューヨークやイタリアなど海外で踊る人もでてきたし、助成金を得てダンスを学ぶ学生もいる。

最も重要なのは、失われつつある伝統を発信していくこと。ツアーやワークショップをやりながら、伝統を伝えていかななくてはならない。マレーシアには豊かな伝統があり、多様な社会をつくるために、研究所を運営している。未来にレガシーを残すために、支援を続けている。

設立者ジョー・ハシャム、ダト・ファリダ・メリカン夫妻より

本日は KLPAC にお越しいただき光栄に思う。クアラルンプールにおけるパフォーマンスの公演数は、マレーシア中の公演をあわせたものよりも多くて、誇りに思っている。一方でクアラルンプールに集中してしまうことで、他の地域で行われていないことは残念で、現在、伝統芸能をどのようにマレーシアの中で広げていくかが課題になっている。

日本は伝統芸能の長い歴史が現在でも継承されている。日本と比べると、サイムダービー財団や YTL などの企業が支えてくれないと、パフォーマンスアーツは生き延びられなかった。シンガポールのように国を挙げて伝統芸能を支えてくれる支援策が必要と感じている。



【訪問日】2016年8月24日(水) 10:00~

【面会者】ジョー・ハシャム(芸術監督)、ダト・ファリダ・メリカン(エグゼクティブ・ディレクター)、イアン・チョウ(ジェネラルマネージャー)、ヤテラ・ザニアル・アビディン(サイムダービー財団取締役)、アーツアカデミー卒業生ら ほか

ペトロナス・フィルハーモニック・ホール/マレーシア・フィルハーモニック・オーケストラ

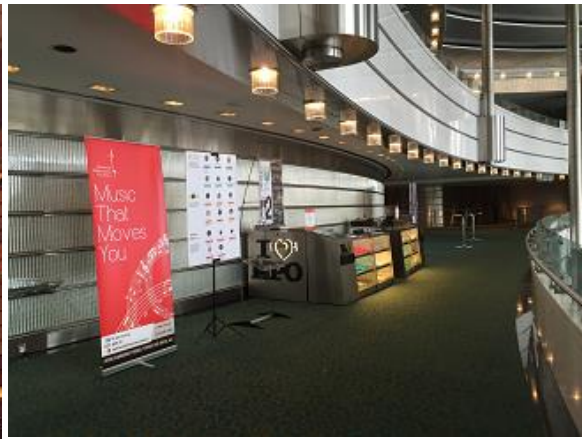
■沿革・概要

マレーシア国内で初めて建てられたクラシック音楽専用のコンサートホール。レジデントのオーケストラ「マレーシア・フィル・ハーモニック・オーケストラ(MPO)」を所有する。ペトロナスツインタワーの建設後、マハティール首相の発案により1998年にホールが開設され、1997年より運営を開始。運営面ではペトロナス社からは独立し、NPO法人として事業にあたっている。

■設備

シューボックス型のホールで902席とロイヤルシート20席、オーケストラが入っているホールとしては世界で最も小さい。響きのよいオーク製でつくられ、音響は3階の一番奥でも最前列と変わらないように設計され

ている。天井のドームや壁の一部は可変式で、オケの規模や楽器によって変えることができる。ホール裏にはテクニカルスペースや、団員の控室、ホールを使ったレコーディングができるスタジオ「Abbey Road」も併設している。



上左) 902席のホール。天井や一部の壁は音響に合わせて可動式となっている。

下左) コーポレートスイート室からの眺め。 下右) 団員控室にて

■プログラム

9ヵ月をワンシーズンとしてプログラムが組まれている。ラマダン、クリスマス、中国旧正月の3ヵ月は休業。年間110~120件、毎週末クラシック音楽を演奏し、そのほかに伝統芸能、地元の音楽公演、海外オーケストラ公演も行われている。年間30%は地元とかかわりのあるものを実施しており、「スペシャル」プログラムでは年一回、地元アーティストとのコラボレーションを行っている。

「ファミリー・ファン・デイ」では家族や子どもでも楽しめるよう、クラシック以外にU2やジブリ音楽のような親しみやすい演目もプログラムされ、「クラシック」「スペシャル」「ポップス」「マレー」のジャンルでオーケストラが演奏を行う。観客は公演ごとのチケット購入もできるが、好きなコンサートを年間で5つ買うと、席のアップグレードなどのパッケージがつく仕組みもある。

■レジデントオーケストラについて

MPOの団員は24ヵ国から来ており、マレーシア人7名、日本人は5名在籍している。今年のシーズンでは日本人指揮者が就任し、初回コンサートはジブリ音楽を演奏した。

ユースオーケストラ「MPYO」も持っており、こちらはマレーシア人だけに限って、8～24 歳までが所属している。MPO のメンバーが教師となって夏休みなどのキャンプでトレーニングし、最終的にはホールでコンサートを行う。

■チケット収益とスポンサーシップ

チケット売り上げは約 75%。すぐ売れるものもあれば、難しいものもある(ジブリは一日で完売)。「ファミリー・ファン・デイ」も人気のプログラム。一番難しいのがクラシック音楽で、好まれる演目は毎回やっても人が来るが、演目によってかなり好き嫌いが分かれる。

スポンサーシップは年間 45 万リンギットで、5 つの公演やアウトリーチ活動に参加できる。ホール内に常設のコーポレートスイート席は、グローバル企業やマレーシア企業などに買い取ってもらっている。クラブメンバーは 1 年、プレミアムメンバーは 3 年ごとの契約。毎年かささず契約してくれる企業もあれば、更新時期に再依頼が必要な企業もある。ホールの運営団体が NPO なので税制優遇はないが、企業側は渉外費として支出しており、スポンサーになることで最大 40%まで税金が免除される可能性がある。

【訪問日】2016 年 8 月 24 日(水) 13:45～

リンブン・ダハン

■沿革・概要

マレーシアの著名な建築家 Hijias Kasturi 氏(2015 年ミラノ万博マレーシア館を設計)夫妻により、自邸の敷地を使って運営されるプライベートのアートセンター。約 20 年前からアーティスト・イン・レジデンスを行い、敷地内には夫妻の自宅の他、6 つのスタジオ、居住施設、ギャラリー、オフィスがあり、アーティストが約 10 人、数ヶ月にわたって滞在できる。広い敷地には、カツリ夫人が管理するハーブ園、プール、インターネットや飲食可能なラウンジがあり、滞在アーティストはリラックスしながら交流を深めることができる。



■主な施設

◇スタジオ

視察時はオーストラリアから 2 名、マレーシアから 2 名の計 4 名のアーティストが滞在しており、マレーシア人女性で、廃材プラスチックを用いて作品を制作するアーティストがスタジオを使用して



いた。11月にリンブン・ダハンのギャラリーで展覧会が予定されている。以前には、福岡アジア美術館でのレジデンス経験があり、日本から持ち帰った色紙や和紙を取り入れた作品も制作すること。

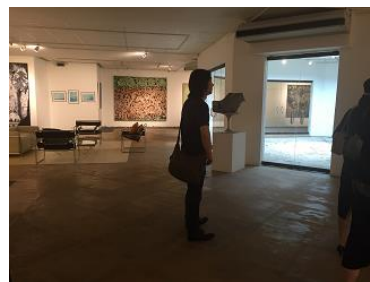
◇レジデント施設

宿泊施設は2つあり、19世紀のジョージタウン式、マレー式の住居をペナンから移築してきたもの。マレー式住居は大工が中国人だったため、鳳凰、龍などの中国式の珍しい意匠となっている。各施設が点在す敷地内では、彫刻の設置や庭でのパフォーマンス公演を行うこともできる。



◇ギャラリー

滞在アーティストがつくった作品をカツリ夫妻がコレクションし、展示しているギャラリー。なかには後に著名になったアーティストの作品もコレクションされている。



■運営

企業等からの支援は受けておらず、完全にプライベートで運営している。レジデンスのマネージャーは週3回勤務。また、参加するレジデント・アーティストの滞在費は基本的にアーティストの自己負担だが、ミャンマーなど発展途上国のアーティストには資金補助を行っている。

【訪問日】2016年8月24日(水) 16:30～

【面会者】アンジェラ・カツリ(ヒジャス・カツリ氏夫人)

シンク・シティ

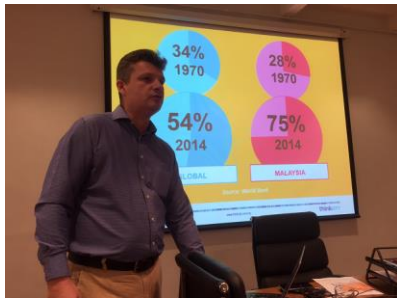
■沿革・概要

政府系ファンド「カザナ・ナショナル」の完全子会社として2009年設立。政府機関でも営利組織でもないコミュニティベース組織として、ジョージタウンの芸術・文化の活性化プロジェクト等を開始し、現在はクアラルンプール、ジョホールバルにも支部を持つ。シンクタンクとして、マレーシアの暮らしに関するワークショップや出版事業も行っている。



■事業理念

現在、世界中でグローバル化の影響を受けた都市化と人口集中が進み、以前に比べ、「どこで働き、どこで暮らすか」が重要な選択肢となっている。



マレーシア・クアラルンプール、マニラ、シンガポールといった都市でも、100年前は通りに人がいて、人々と市場の交流があったものが、現在は高層ビルやショッピングモールなど大きな施設が並び、美しくない景観になってしまった。1960～70年代には数メートル前が見通せるような街だったのに、今では地域に人々が深く根付いておらず、祖国という意識も薄れた。現代都市では、アパートの前にバイクを置き、街路樹に看板を設置し、公共物にステッカーが貼られる。また一方では開発が早すぎ、都市のインフラが追いつかず、洪水やゴミの問題が発生している。これらの問題はどこの都市も同様で、このような都市化の必然性があるのか、というのが課題意識としてある。

ペナンでは、マレーシアの昔ながらの生活をしている「カンボン」(田舎・村)などが現在も残っている。21世紀の生活や暮らしとのギャップを埋めるべく、常に対象となる投資先を探している。シンクタンクとして、都市計画家や市行政とも話し合い、自主事業だけでなく他団体の事業支援も行っている。

■ジョージタウンでの建築遺産修復等の取り組み

ジョージタウンは2008年に世界遺産に登録されたが、30～40年前の施設が残っている。シンクシティでは3,000ドル以下の助成金で建築遺産を保護・修復するプロジェクトを行い、中国の伝統的な建築物やホテル、カフェ等の美化・整備を行った。

公共建築の例では、インド系イスラムの100年以上前にできたとても有名なモスクがあり、中にモザイクのような伝統的な装飾があった。長らくその装飾に関する工芸的な知識が失われていたが、専門の職人を招いて、修復を行うことができた。

街の空き地では40～50年前は違法な市場やフリーマーケットが行われ、ドラックやアルコール中毒者、孤児など社会の最下層の人たちが集まっていたが、今はこの公園が地域振興のための美しい公園に生まれ変わり、交流の場となっている。以前ここに集まっていた路上生活者たちは、市機関によってよりよい環境のところに移っている。路地に面した店舗の間には、壁画のようなアート作品を設置し、休日にはここを通る多くの人や観光客が写真を撮っている。



■ジョージタウン・フェスティバルについて

2010年から毎年、州政府が組織・運営しているアートフェスティバルで、街のいたる場所で1ヵ月間にわたりさまざまなプログラムが展開される。優れた才能を持った人々が都市に集まり、たくさんのアートに囲ま

れてより面白い暮らしをすることがコンセプト。パブリックアートは多すぎるくらいかもしれないが、インタラクティブなことができているのは成功といえる。

シンクシティでは公共空間でのパフォーマンス、特に伝統音楽の団体を優先的にサポートしているほか、「Butterworth Fringe Festival」も支援している。このフェスティバルは地元および国際的なアーティストによるショーケースになっており、インスタレーションや展覧会、映像上映、ライブパフォーマンスなどが行われる。アート関係者だけでなく、訪れた人々を近づけることを目指しており、100人くらいの観客が訪れた。

■その他の都市創造の取り組み

- ・ テレビで K ポップを見ているような若い世代や子ども達でも、地元の駅でバンドによる演奏があれば、混み合う電車でも 10 分音楽を聴くことでハッピーになれる。文化で人々と都市をつなげ、都市を変えたい。
- ・ 2 年前にクアラルンプールで、稼働していない古い印刷工場を変える手伝いをしてほしいとの依頼があり、カフェを併設したホールに改修し、さまざまなイベントが行われるようになった。
- ・ 市の機関が改修した例では、かつての青果市場 Medan Pasa 広場は、美しいが非常に暑く人が訪れない場所だった。1 カ月多くの伝統芸能や音楽、フードカーを集めプロジェクトを行い、賑わいを取り戻した。
- ・ 空港そばの国営新聞「THE STAR」が入っているビルは、2 階はペナンに関する図書館として、遺産関係のオフィスや、インキュベーションスペースも入っている。地上階にはペナンやマレーシアに特化した書店を設け、マレーシアの建築や音楽に関する本を扱い、バティックのワークショップが行われるなど、子どもたちが伝統的な文化芸術を学ぶことができる。
- ・ そのほかペナンの学術的な歴史などを学べる無料の勉強会の開催や、英国建築協会附属建築学校 (AA スクール) のビジティングプログラムの東南アジアネットワーク (セブ、バンドン、チェンマイ、ペナン、KL) にも入っており、東南アジアのアートネットワークを構築することを目指し、各地の政府、海外組織と交流を図っている。地方政府は各地で強い力をもっているし、AA は資金がある。セブから学生がマレーシアに来て、また戻ってくるような仕組みである。

■政府機関との関係

州政府はそれぞれの立場があるので、中央政府や、各自治行政に個別の働きかけが必要。ジョージタウンで活動を始めたときは、アートフェスティバルが行政を助けるハブになりえるということに州政府や市行政が賛成してくれた。国・行政の文化遺産政策に対して、我々が展開するワークショップなどで人々が訪れるようになり、小さいながらもインパクトを与え続けられている。

■親会社 カザナ・ナショナルとの関係

出資会社のカザナは 1993 年設立の半官半民の投資機関で、小規模の地方銀行に参画しており、海外にも拠点を持つ。シンクシティ会長はカザナ理事であり、ジョージタウンの出身者。1950 年代は、香港もジョージタウンも同じだったが、その後ビジネスはクアラルンプールに集中してしまい、郊外の都市はどんどん状況が悪くなった。解決策を求めて、町も小さく、開発しやすいジョージタウンからプロジェクトを始めた。

■日本について

KL は伝統的なものを失っているが、日本は近代化されいながら伝統的なものも残っているところが面白い。日本のモデルから多くを学びたい。

【訪問日】 2016 年 8 月 25 日 (木) 15:30～

【面会者】 ダンカン・ケイブ (シンク・シティ、アーバン・ナレッジ プログラム・マネージャー)

以上